ハーフエルフの憂鬱

SMILE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ハーフエルフの憂鬱

【Ｎコード】
Ｎ５１２１Ｘ

【作者名】
ＳＭＩＬＥ

【あらすじ】
ハーフエルフの女の子と取り巻く家族のお話です。

その1

エルフと人間の間に生まれた者はハーフエルフと呼ばれる。

人間にもなれず、エルフにもなれない半端者。

それが私。ラルー＝スエル

私の母親がエルフで父親が人間だった。

私の耳は、父の耳より長く母の耳より短い。

母は、とても美しい人でよく笑う自慢の母であり、父はとても優しく、なかなかの男前でちょっと浮気性でだらし無い所もあった。

酒場でお姉さんを口説く姿を母に見つかると、母が微笑みながらキレてフルボッコにされていた。

が、次の日、ボコボコの顔をしながら「僕の愛しのエルザ！大好きだよ」

「ふふふ、私も！ディーン！」と朝から、子供達の前で堂々とイチャつく。

父様…右手折れてますよね。というツッコミは入れずに子供達はもくもくと朝食を食べるのが日常だった。

そんな父と母が大好きだったが、ハーフエルフはエルフと同じ成長速度が遅く、身体的な成長の速度が人間の5倍かかる為、見た目が

人間の１０才くらいの子供に見えた頃、父は亡くなった。
母は悲しみ嘆き、一週間泣きつづけた。
父様が死んで、一週間目の朝
突然、母の泣き声が止んだ。

「皆！ついてらっしゃい」
母様は、さっきまでの意気消沈していた様子は微塵もなく、荷物を手早くまとめていた。

「か、母様何してるの？」
兄のクラスが恐る恐る聞くと、母は例のニッコリ笑顔だった。母様は、いつも笑っているが、ニッコリ満面の笑顔は、非常に怒っているなどの不吉な前兆だ！

子供達、一瞬で凍りつく。
ヒイィィィ……例のその笑顔は怖過ぎます！

「ディーンがいなければこの地には用がないわ。
というか思い出がありすぎて、母様泣き続けちゃう！
母様の安らかな笑顔とあなた達のためにこの家を売払って、実家に帰る事にしたのよ！」

えっ！まだ父様が死んで一週間なのに、なんて切替の速さ！むしろ世間的にまだ泣き続けるべきでは？

そんな我々兄弟の気持ちを知ってか知らずか母は、エルフの国へと私達を連れて帰った。

エルフの国のパチーノ
初めて足を踏み入れたエルフの世界。町は、白と青色で統一されており、道は魔法で青く光っている。
更に、行き交う人は皆さん美男子&美女ぞろい。
地味な顔の（対エルフ比：言い訳ではありませんが、もとの町ではかわいいと評判の兄弟でした。エルフがおかしいの！）我々兄弟は注目の的だった。

あぁお家に帰りたい！けどもぅ家もないし！

母はの実家は、エルフの国の中で貴族の地位にある家だった。

「お父様！お母様！かわいいエルザがかわいい孫達を連れて今帰りました～」

母様そのテンションの高さどうにかなりませんか？

ここで話は逸れますが私と兄弟達を紹介します。
長男クラス。年齢５０才（見た目１０才）
母様に似た顔立ちで金髪碧眼の美丈夫。
ちなみに私達は三つ子です。

同い年でもクラスは、長男の自覚を持ちすぎる程持っており、（父母があんなんだったので、自分達だけでもしっかりしなきゃという長男体質）
綺麗な顔に似合わず趣味が家事と弟妹達の育児。
口癖は、「まったくもぅ」
頼りになる兄様です。

長女私、ラルー
三つ子の真ん中。私は、父の母つまりおばーさまに似てしまい、髪の毛は鮮やかなチェリーブロンド。つまり赤毛。目の色は、これまた母様方のおばーさまに似た紫色。
悲しい事に顔立ちは、美女ではなく普通の顔だが、珍しい赤毛と紫の目は、人目を引いてしまい、正直コンプレックス。私は赤毛の〇ンの気持ちが痛いほどわかる！

次男フィーダ。
三つ子の1番下。
髪はダークブロンドで目は黒
三つ子の中で1番最後に生まれたせいもあるかもしれないが、甘えん坊。どんな人でも上手く相手にできる天性のタラシです。しかも、上目遣いがもぅ父性&母性本能くすぐりまくりでフィーダのお願いを突っ張る事がでた人を私は知らない。

次女ライン４０才（見た目８才）
金髪で茶色の目でこれまた母様に似た美人だが泣き虫&超ビビり。寝る時は私と一緒にベッドに入って手を握っていなければ怖くて寝れない。

年の離れた末っ子カル３才。父様が７０才の年に生まれた（元気なエロじじぃな父様…）
まだほんの赤ちゃんだから皆のアイドル。茶色のくるくる巻き毛と緑の目が父様そっくり！

総勢五人の子供を連れて元気に実家の門を叩く母様！
母は強し！

扉が開くと黒髪に紫色の目をした今まで見たことが無いくらい飛び

切り綺麗な女の人が出てきた。

「エルザ？本当にエルザなの？顔をよく見せてちょうだい。」

「お母様、娘の顔忘れたの？いやだわボケちゃって！ただいま帰りました。」

母様、今この美人を「お母様」って！どうみても母様とあまり年が変わらない人だと思いますがつまり、我々のおばーさま！　？

「あなたが、自分を探してきます。と訳のわからない書き置きを残して家出してどのくらい経ったと思ってるの！散々探したのに見つからないし、何を考えて……」

おばーさまがお小言を言いながらふっと目線をこちらに向けて固まった。

「エルザ！？この子供達は何！
まさか人間との間に、こ、子供を作ったの！？」

「だから、孫連れて帰ってきたって言ったでしょ！
それに、たまたま愛した人が人間だったのよ。結婚して子供を作って何が悪いの？私の宝物だし、彼の大事な忘れ形見よ！」

「そんな、人間なんかと、けっけっけっ結婚ですって！」

「そう。結婚して５５年経ったわ。でも、一週間前に彼は亡くなった…。
だから子供達を連れてこっちに戻ったの。魔力が安定してないから、人間の世界にいたらご近所に迷惑がかかるしね。ここなら使いたい

放題じゃない！
お父様とお母様は孫に会えるしどっちにとっても良い話でしょ」

例のニッコリ微笑む母様の顔を見たおばーさまは、口を開きかけたが何も言えず、最後には「ついていらっしゃい。」と一言いい、私達は、今まで住んでいた家の三軒分が余裕で入る大きさの一室に通された。

その部屋は、白で統一されており、白い大理石の床と柱に白い壁。大きな窓には白いビロードのカーテンがかけられ、同じく大理石でできた大きなテーブルに白い椅子が並べられていた。

「客間でなく、会議室に通すとは、お母様も人が悪いわね…」

母様は不機嫌そう椅子に座ると膝を組み決して褒められるようなたたずまいではない格好でに言い放つ。

「か、母様。私達出戻りだからやっぱり世間的にも色々とあるんだと思うよ」
私は恐る恐る言った。

「何言ってるのよ。私達は血が繋がってる、れっきとした家族なのよ！世間体より家族でしょうが！」
はい、そうです。家族です。しかし、５０年程家出されてましたよねっとツッコミたいのを堪える。

「ねぇ、母様。お祖母様の言葉を聞いて思ったんだけど、人間って、エルフの中では蔑まれる存在なの？」
クラスが聞く。

「あ、それ俺も思った。だって俺の笑顔が通用しないんだもん！びっくりしたよ」

フィーダあんたは、黙りなさい。

「おばあ様、僕達の事嫌いなの？」ラインがおずおずと聞くと、

「何言ってんの！」と豊満な胸に私達を力いっぱい抱きしめた。

「あんた達みたいな賢くて可愛い子達が嫌われる訳ないじゃない。ただ、エルフってちょっと固くて自分達以外の種族を受け入れられないのよね。

本当頭固いわよ！何様なの？全くもぅ。

でも大丈夫！私達は家族だし、母様も側にいるからどんな事でも太刀打ち出来るわよ！」

母様それは、大丈夫と言わない。

一抹の不安をよそにお母様は、例の笑顔を見せた。

か、か、母様！ケンカだけはやめてね！お願いします。

突然、会議室の扉が開くと金髪碧眼の絵に描いたような王子様みたいな男の人が入って来た。

「エルザ。久しぶりだな」

「お父様、お久しぶりです。お母様からは、詳細はお聞きになって

ますよね？私達の事。」

…まじですか。おじーさまですか。この方が…

「あぁ、聞いた。５０年もの間音信不通だった上に、よりによって、人間なんかと子供を作りったお前とハーフエルフの子供の世話をしてほしいと。サルン家の恥さらしもいいとこだ。」

「恥さらしでも、なんでも事実は事実です。れっきとしたお父様の孫をハーフエルフという言葉でひとくくりにしないで！私達には、お父様とお母様にすがるしかないんです。子供達は、本当にいい子達ばかりだわ。絶対にお父様も気に入るはずよ！」

「私は、ハーフエルフを見るのも鳥肌が立つがね。しかも、それを孫と認めろとなど虫ずが走るわ！」

「う、う、う、ゥエェェーン！ウェーン！「ヒック、ヒック、エェェーンエェェーン！ビエェーン」」張り詰めた空気にカルが泣き出し、それに合わせてラインも泣き出した。

パァーン！ガシャーン

泣き声と共に会議室にあった机や椅子が動き出し、窓ガラスが粉々に砕けていった。

クラスと私が必死にカルとクラスをあやすが泣き止まず、緊張していたクラスも「カル、泣き止んで…ヒック、な、なぎやんでぇぇエェェーン」と泣き出し、それを見ていた、フィーダまでも泣きはじ

めた。初めて自分に向けられる蔑みの眼差しと兄弟達の泣き声に私まで悲しくなり、とうとう我慢できずに泣き始め、泣き声の大合唱になった。私達の泣き声と共に屋敷全体が揺れ、壁や床が壊れはじめ一層泣き声が大きくなった。

「こ、こら泣き止みなさい！」
おじーさまが慌てて止めに入るが、一旦涙のスイッチが入った私達は、そうそう止まらない。

「ビェーン、ビエェェーン！ギャーギャー！ウェーンウェーン」

「このままじゃ屋敷が崩れるわね。お父様！私達の面倒を見てくださるなら、止めるけど、どうする？」
平然とした顔で母様がおじーさまに聞いた。

「わかった！わかったから今すぐ泣き止ませなさい！」

「ありがとう！大好きよ」
ニッコリ微笑んだ母様は、私達の方を見ると「今から１０数える間に泣き止まないと、承知しないわよ。１０、９、８、７…」と笑顔で言い放つ。

例の笑顔を向けられ、条件反射でピタッと泣き声が止む。

パブロフの犬状態の私達。
ハーフエルフは、力が強いため、感情のコントロールができない内は、魔力が暴走し、色々なで事がおきてしまう。会議室は全壊していたが、なんとか屋敷は無事で済んだ。

おじーさまがよたつきながら、会議室を出ていくと、母様が

「あなた達よくやったわ！本当いい子達！これで、しばらくは安泰よ」と言ってまた私達を抱きしめた。

母様、泣いて頭がボーッとしますが、母様が喜んでるって事はグッジョブって事なんですかね？

その後、それぞれ各個人の部屋を割り当てられたが、今まで自分の部屋を持った事がないのと、家族が離ればなれになる事の不安から、しばらくの間、私達６人が同じ部屋になるようお願いし新たな生活が始まった。

その2

私達がパチーノに来てから、今までの生活とは、がらっと変わった。

朝、私達六人が寝ている大きなベッドに侍女三人が起こしに来てくれ、それぞれに身支度を整えてくれる。

服もいつも同じ服を着ていたのに、毎日違う服を用意される。

一度着た服は、どうなるんですか？まだ全然着れますよ！なんてもったいない事してるんですか！とツッコんでみたが何を言い出すのこの子は的目線で見られ、それからは、出されるものを静かに着ている。

その後、朝ごはんを食べる食堂に移動する。

食堂には、おじーさまとおばーさまと一緒に朝食を取るが、おじーさまは、私達の事が好きではないので、全くの無視。

ところが、おばーさまはどうやら子供大好き気質のようで、最初はハーフエルフの孫に戸惑っていたが、時間が経つに連れ溺愛し、世話を焼き始め、おばーさまが口を開かない時間はない。

「クラス！顔にパンがついてますよ！おばーさまが拭いてあげるわね。

あら、カルは、お腹が空いてたのね、もぅお皿が空だわ！早くおかわりを持ってきてちょうだい。

ラルー、ニンジンが嫌いなのはわかるけど、今よりもっと美人になるから一口でもいいから食べなさいね。

またラインは、お口が動いてないわよ。違うものがいいなら作らせ

るから何が食べたいの？言ってごらんなさい。え？お菓子？そうねぇ、お皿にあるご飯食べたらクラスの好きなケーキをあげますよ。ええ約束するわ！

フィーダ、肘をついてはダメよ。せっかくの男前が半減しちゃうわよ！そう、姿勢を正しく美しい所作をしていれば、あなたは素敵な紳士に見えるわ！」

おばーさまは、本当にうれしそうに私達の世話を焼いてくれるので今では皆おばーさまから引っ付いて離れない。

母様は、その光景をしたり顔で見ている。

母様、計算ずくだったんですね。っていうか、母様私達にしつけという事は、一切してませんよね。おかげでのびのび育ちましたが、今現在教養が全く見についていないから苦労してますよ…。テーブルマナーくらいは、早めに教えおいて！

その後は、年齢別に別れ家庭教師のもとでお勉強。

カルはまだ赤ちゃんなのでおばーさまと過ごしている。

その間、母様はおじーさまとは、一緒に伯爵家の難しいお仕事　をしている。

今日は、楽器の練習だ。

クラスとフィーダは、飲み込みが早く先生が稀に見る逸材と褒めているが私ときたら全くできない。

違う意味で稀にみる逸材と先生に言われてしまった。

すっかりやる気を無くしてしまい、先生にお腹が痛いから自室に戻るといい、部屋を出た。

「ラルー大丈夫？」

「クラス！大丈夫よ。わざわざ追いかけてくれてありがとう。でも、本当に大丈夫！クラスは続きをして」

「ラルー…気にしなくていいよ。魔力だったらラルーが僕らの中で1番なんだからね。音楽なんて、生きてく上では必要ないからさ」

そこまで気をまわされると余計落ち込むよクラス。

「違うの、本当に朝ごはん食べすぎたみたいでお腹痛いの。あ、でもおばーさまと母様には内緒にしてね。心配するから。」

「わかってるよ。ゆっくり休んで。」

優しい兄様だけど、その気配りが今は辛いわ。悔しいから一人でこっそり練習しようっと！

広い庭に出ると人がめったに来ない東屋がある。（この前、皆で探検した時に見つけたの）

よし、ここで練習しよ！

私はこっそり隠し持ってきた横笛を出し練習を始めた。

フゥーフゥーフゥピーフゥー

いくらやっても音がでない…

出ても的外れな高音だけだし。何故だ！？

クラスもフィーダも始めからできたのに…

あたし、本当に才能ないかも…

いやいやいや、同じ兄弟なんだから私にだってできるはず！！

気を取り直して、笛を持った。

フゥーフゥーフゥーピーフゥーフゥーピーフゥーフゥーフゥー

ブフフゥー

小1時間くらい練習したが、全く音がでない。

「何よこの笛！」

あまりの出来なさ加減にほとほと嫌気がさし、横笛を芝生に投げ出した。

「プッ（笑）」

え？え？え？

誰もいなかったよね…。今。誰か笑った？

周りを見渡すと、私のすぐ後ろになんとおじーさまがいた。

「あ、あの…これは、その…」

やばい癇癪起こしたとこまで見られてた？

「お前は、なんでこんな所で笛を練習している？兄弟達と一緒では

ないのか？」

「あ、えっと一緒にいたんですが、二人はすぐに出来てしまい、私だけが…出来ないんです…」

あぁただでさえおじーさまに嫌われてるのに、更にまた笛が苦手の癇癪持ちという嫌われ要因が加算されてしまう！

あぁ私のバカこんなとこで練習しようとして！

「出来ないのが悔しくて一人で練習して、更に出来なくて癇癪を起こしたのか？」

「…はい」

「フッハハハ！」

え？お、おじーさま？何がそんなにツボなの？

キョトン顔の私に散々笑いようやく落ち着くと

「私の幼い時も同じ事をしたよ。更にエルザも全く同じ事をしてた。エルザの場合は、笛を粉々にしたけどなぁ。

笛が苦手なのは我が家の伝統らしいな。散歩の途中で今日は、懐かしいものを見れた。」

そう言うと、おじーさまは屋敷の方へ戻っていった。

その3

その日の夜、皆が寝静まった頃に、仕事を終えて寝る支度をした母様がベッドに入ってきた。

「お帰りなさい、母様」

「あら、ラルー起きていたの？」

「うん、なんだか眠れなくて。」

「あらあら、睡眠はお肌にとっても必要なのよ。母様が隣に寝てあげるから、もう寝なさい。」

そう言って母様は、私の背中をポンポンとゆっくり優しく叩いてくれた。

「うん。……。

ねぇ……母様も横笛が苦手だったのよね？」

「は？？え？横笛！？

いきなり何の事。横笛？そうねぇ昔、習った覚えがあるけどなんでまたそんな事いいだすの？」

「今日、おじーさまに聞いたの。

私が横笛が苦手だっていったら、おじーさまも昔、苦手で母様も苦手だったって。

しかも三人とも癇癪起こして、笛に当たっているから、横笛が出来ないんのは伝統なんだって。」

「お父様がそんな事話したの！！驚いた。
まぁ確かに、私、めちゃくちゃ苦手だったわ。いくら吹いても音が出ないもの。
ラルーも似ちゃったか（笑）
ところで、お父様にいつ会ったの？」
「んーっと、お昼前くらいかな？」
「……あんの狸じじいめ、少し散歩をするってそのくらいの時間に執務室から出ていったのよね。
そしたら、帰ってきてからやたらと朗らかになったなぁと思ってたら、そんな事があったのね。
ラルーと会った事なんて、私には一言も言わずに！
ところで、ラルー！あの狸にイジメられなかった？怖い思いしなかった？」
例のニッコリ笑顔（目の奥は、全く笑ってない）で肩を捕まれた。
母様、今が1番怖いです！
「だ、大丈夫。そんな事なかったわ！」
「そう。…なんにもなかったのね。よかった。」
母様はホッとした様子で私を抱き寄せた。
「…ねぇ母様、言いにくいんだけど…、おじーさまって私達の事嫌いなんだよね？

初めて会った時なんて、私達の事見るのも嫌そうにしてたのに、今日は、そんな感じではなかったの。どうしたのかしら？」

「うーん…。私達の存在に慣れてきたって事が1番かしらね。それに、ラルーの顔だちが、どことなく、幼い頃亡くなったった私の兄様に似てるからかもね。」

「母様にお兄様がいたんだ！でも、私の顔は地味だから父様似なんじゃないの？母様や、おじーさま・おばーさま、みたいなエルフっぽい顔立ち（美形）ではないわよ。むしろ、顔立ちならクラスやフィーダの方がエルフ顔じゃない？」

「あら、ディーンは地味顔なんかじゃないわ！若い時はそれはもう美しい顔だったんだから！」

母様…私の顔が地味ってさりげなく言ってませんか？

「お兄様は、お父様のお母様、つまりラルーからしたら曾お祖母様に似てエルフには珍しく地味な顔だちだったのよね。
しかもお兄様の瞳の色は、私のお母様に似て紫色だったの。
ラルーと同じでしょ？

私が小さい頃お父様は、それは厳しくてね。もちろん、愛情があっての厳しさだったから、そんなに辛くはなかったけどね

でも、特に自分の後継ぎにするお兄様には、厳しくしてたわ。

私があんた達に厳しく言わないのは、そのせいかもね。ふふ」

いやいやいや…厳しいっていうか怖いですよ。微笑みの裏の恐ろしさってやつですか？ある意味、十分に厳しいですよ

「ある日、お兄様はお友達と遊びに行って、帰りが遅くなってしまったの。
そうしたら、お父様に「時間を守れない者は、ずっと外にいろ」って叱られて、家から締め出されちゃったわ。
お母様がお父様に取りなって、1時間後くらいに、なんとかお兄様を家に入れて、夕飯の残りを食べさせてあげたんだけど、お腹が空きすぎて、がっついたみたいで、食べ物を喉に詰まらせて…
その時、お母様も侍女に呼ばれて次の日、うちで開かれる事になってた夜会の食べ物の献立を決めている最中だったから、誰も食堂にはいなくてね。見つけた時には手遅れだったわ。」

おじ様……。つーか、話しの流れからおじーさまとの確執か何かで亡くなったと思ってたら食べ物を喉に詰まらせるって！
それよりなにより、いいとこのお家の子が、食べ物にがっつくってどんだけハングリーだったのよ。

ツッコミたい事が山ほどありながら、ここはぐっと堪えた。

「お父様もお母様も歎き悲しんだけど、中でもお父様のの気の落ち込み様ったら尋常じゃなかったわ。

それからは、感情もあまり出さなくなったわね。

それが、今日、あんなに朗らかになった理由がラルーと会ったから

なんて凄いわよ！ラルー。グッジョブよ！」

グッジョブって母様…

まぁ、しかし、おじーさまとの距離が少しは埋まったって事かなぁ。

怖いけど、もっとお話したいなぁ。

そう思いながらラルーは眠りに落ちた。

その4

その後、特におじーさまから話し掛けられる事はなく、いつもの日々を送った。

「今日は、パチーノの建国記念日で街中お祭りをやっているのよ。せっかくだから、皆で見に行きましょう」

おばーさまの提案で、私達兄弟と母様とおばーさまでお祭り見物に出かける事にした。おじーさまは、お仕事だそうで不参加です。

そーいえば、昔、人間の街で暮らしてた時に謝肉祭かなにかのお祭りに一度行った事があるが、家族とはぐれてしまったフィーダがエルフと間違えられて（エルフに会った事のない人間は、エルフとハーフエルフの区別がつかないから私達の事をエルフだと思ってる人が多い…。まぁハーフエルフも十分に珍しいけどね）人買いに誘拐されそうになった。

暴れるフィーダを誘拐犯が失神させて、袋に詰めようとしていたところを、父様に発見され、更に母様が誘拐犯達を半殺しにしたという凄い過去がある。

私達は、それ以来祭には行っていない。

久しぶりのお祭りだから、フィーダには、悪いがワクワクする！まぁフィーダもトラウマにはなっていないみたい。

さっきから「クラス！わた飴とホットワインは絶対外せないよな！」

とウキウキ顔。

「お前、はしゃぎ過ぎて、またさらわれるなよ」　と冷たい目でクラスに突っ込まれていた。

しかし、フィーダはどこ吹く風。

「大丈夫だよ。俺、魔法使えるようになったから逆にぶっ倒してやる！」

「ここはエルフの国だから、みんな魔法が使える事忘れてるだろ。今回は絶対にはぐれないようにしろよ。フィーダ。」

クラスが釘をさす。

「まぁまぁ、クラス。フィーダだってよくわかっていますよ。

フィーダ。クラスはあなたの事を心配だからこう言っているのよ。きちんと気をつけるわよね？」

おばーさまが間に入ってとりなす。さすが、名バッファーだわ！

そうこうしているうちに馬車が広場に着いた。

いつもは、青と白で統一されている街が、目にも鮮やかな色とりどりの飾りつけをされている。

所せましと出店がひしめき合っており、エルフだけでなく、ホビットやドアーフ、ピクシーなど様々な種族の人達が店を構え　見たこともないような物を売っていた。

「トロール山の地下鉱脈で取れたオリハルコンと金細工はいらんかね？」

「妖精の粉を振り掛けた凧は、どんどん上がるよ。」

「イエティが作った、アイスクリームだよ！レモン味、バニラ、ミント味、ベリー味、チョコレート味の中から選んでね」

「私達人魚の涙からできた一級品の真珠のネックレスはいかが？」

「太陽の花の蜜で作ったプティングよ～安くするわよ」

「魔女に伝わる若返り薬はいらないかい？」

色々な種族の出店がでていて、どれも目移りしてしまうラインナップだ。

いい匂いと綺麗な品物に驚いていると、パレードの紙吹雪が舞い散ってきた。すると舞い上がった色とりどりの紙吹雪同士がくっつき、紙の小鳥になるとリロリロと不思議な泣き声をあげながら、飛んで行った。

す、すごー！！なにこれ…

凄すぎる。しかも屋台の食べ物は、全部おいしそう～！

そしてキレーめちゃくちゃ楽しそう！！

私は、目を輝かせて聞いてみた

「クラス、フィーダ、ラインどれから見ようか？」

「そうだねぇ。ラインは祭が初めてだよね？どれが見たいかい」

「…私、よくわからないからクラス兄様、ラルー姉様が見たい物を一緒に見たいわ。」

「それじゃ、ラルーは何が見たい？」

クラスはレディーファースト精神の固まりだから、女性や子供の意見を必ず先に聞く。
本当に優しい兄様だ

「そうね、今日は暑いからイエティのアイスクリーム食べてみたいな。」

「いいね！俺もアイス食べたいと思ってたとこ！レモン味がいいな」

フィーダも大賛成。

「それじゃ、さっき貰ったおこずかいをそれぞれに分けるね。」

そういってクラスが一人一人に硬貨を分けてくれた。

「母様達は、広場でお茶してるから、あなた達は好きな物見ていらっしゃい。大きくなったからあなた達だけでも大丈夫でしょう。でも、フィーダは絶対にはぐれないようにね。言われなくてもすると思うけど、ラルーとクラスは、ラインの面倒を見てあげてね。」

母様のお許しが出たので私達四人（カルはまだ小さいからおばーさまと母様と一緒）は、イエティの屋台へ向かった。

その5

イエティの屋台は、全て氷で出来ていた。おそらく、氷系の魔法を使っているみたいで、気温は高いのに一切溶ける事はない。

「すいませーん。レモンアイス2つとバニラとチョコ1つずつ下さい！」フィーダが元気に注文する。

「レモンアイス2つとバニラとチョコ1つずつね。」

重低音な声と共に、店の奥から真っ白な毛で覆われた人型のモフモフした巨体が現れた。

私達は一瞬固まった。

なにこれ！イエティ（雪男）って本当にいるんだ…

推定、3メートルもある人間には、生まれてこの方出会った事がない我々は度肝を抜かれた。

「今日は、暑いからアイスクリームはきっとおいしいよ。ん！？匂いが似た匂いだから君達は兄妹だね。仲良くお食べよ。」

ガタイの割に非常に優しいイエティのおじさんは、コーン型の氷にアイスをたっぷり入れてくれた。

「氷のコーンは、手で触っても溶けないし、触ってもちょうどいい冷たさにしているから冷たくて持てなくなる事はないよ。味もソーダ味にしているから食べても美味しいよ！」

そういって、一人一人に手渡してくれた。

レモン味のアイスは、一口食べると冷たさとレモンのすっぱさと程よい甘さで思わず

「おいしーい」と叫んでしまう程、超絶においしい！

私達は、アイスを食べながら屋台を見て回る事にした。

「レモン味のアイス超うまい！ライン、バニラ味一口、俺にちょうだい！」

「いいよ」

「こら、フィーダ！お前の一口は大きいぞ！」

「いいのよ。クラス兄様、ラルー姉様も食べてみて。おいしいから」

「じゃあライン私のレモン味も食べてみて。スッゴくおいしいよ！クラスもどうぞ！でもチョコ味も一口くれる？」

「んん！バニラうま！クラス俺もチョコ味を一口ちょうだい！」

「フィーダ私が先だから！」

「ラルー、フィーダ喧嘩しない！ラルーが先でフィーダは後だよ！」

貧乏暮らしが長かったので、回し食いが身についている私達…

でも、これも楽しいんだよね。

和気あいあいとアイスを回し食いしていると声が聞こえた。

「うわぁ何あれ？」

「貧乏くさい…。有り得ないな。気持ち悪い」

前方からの声に気がつきアイスから顔を上げると、そこには顔立ちが似ている男の子と女の子のエルフの子供が立っていた。おそらく兄妹だろう。

二人ともプラチナブロンドに緑の目をして年齢的に私達と同じくらいだ。

嫌な感じ！身なりがいいから、おそらく貴族だろう。金持ちって嫌な奴が多いわ。

人間の町にいた時もそうだった。しかし、ここで金持ち相手に喧嘩をするのは、得策ではない。ひとまず、聞こえない振りをするのが絶対にベター。

気づかない振りをして通り過ぎようとすると

「あいつら、半分人間の匂いがするから、きっとハーフエルフだよ。しかもあの女の髪見てみろよ。赤毛だぜ！気持ちわる！血みたいだ」

き、貴様ら、一番コンプレックスな髪の色を非難したか…。しかも気持ち悪いと！

しかーし、ここは、が、我慢…。

「私、赤毛って初めて見るわ。本当に赤いのね。女の子なのにかわいそー（笑）」

堪忍袋の尾が切れた。

「私の髪の色が何か貴方達に迷惑かけた？」

ニッコリ笑いながらバカ兄妹に近づく。

すると兄貴と思われる方が私を睨みつけ「ハーフエルフの分際で俺達に話し掛けるな！」

ほざけ、バカ男。言うに事欠いて、話し掛けるなだと？！

怒鳴りつけようとして口を開いた瞬間にニッコリ笑ったフィーダが割って入ってきた。

「なぁ、お前らがどのくらい偉いんだよ？人を髪や目の色や種族で判断するしか脳がないアホな奴らに俺の大切な姉貴の事を臭い口で批判しないでくれるかな？」

するとクラスは、更にフィーダとバカ兄貴の間に割って入ってきた。

「赤は、綺麗な色なのに君達の目には血の色に見えるなんて、君達は、親から虐待でもされたのかい？かわいそうに。

しかも、エルフの狭い世界しか知らないのに人間を蔑みハーフエルフを蔑む事で必死に自分の地位を確率しようとあがいているなんて…。かわいそうの一言につきるよ。これから先も必死で頑張って蔑みながらの人生をまっとうしなければならないなんて…。なんて、かわいそうな人達なんだろう。頑張ってね」

クラス。毒舌過ぎ…昔からクラスは兄妹達がイジメられると心臓をえぐるような言葉を相手に突き付けていたが、ここに来てもまだその習性が抜けていないようだ。

「兄様、姉様、もう行きましょ。これ以上、次元の低い人達相手にすると時間がもったいないわ。バカは死ななきゃ治らないってこの前先生から教えて貰ったの。だから、この人達に費やしている私達

の時間が刻一刻と過ぎるのが本当にもったいないわ。」
笑顔でラインが私達を促す。
ライーン…。あんたまでも…。
いずれにせよ我々は怒ると母様に似て笑顔でキレる。血はこわいわ…。

我々兄妹の笑顔毒舌攻撃にビビったエルフ兄妹は、コソコソと人込みの中へ消えて行った。

ビバ兄妹プレー！
まぁ、悲しいかな私達兄妹は、（カルはまだ片言しか話せないので別ですが…）母様に似ている部分があるんです。

血の気が多いのは、きっと遺伝です。

その6

バカ兄妹との一悶着が終わり、気を取り直して、再び屋台の探索に回った。

人魚の屋台に立ち寄ると人魚が売っている真珠は驚く程大きくて綺麗だ。

ちなみに人魚さん達は大きな水槽が屋台の売り子側に用意してあって下半身は水に浸かりながら商売をしている。

すげぇ…。屋台を開く前の準備が半端なく大変そうだ。

「この髪留めラルーの綺麗な髪に似合うんじゃない？」

クラスが手に取った髪留めは小さな真珠をあしらったかわいい髪留めだ。

「あ、本当だかわいい！買っちゃおうかな。値段も手頃だし」

「いいよ。僕が買ってあげるよ。おばーさまから貰ってるおこずかいも持ってきてるからプレゼントしてあげる。

ラインには、このペンダントはどうかな？似合うと思うよ。」

さすが、クラス！さっきのバカ兄妹に言われた髪の色を卑屈に思わないように、さりげなくプレゼントを買ってくれた。

なんて、よくできた兄だろう。

私は、素直に申し出を受けクラスに髪留めを付けてもらい、ライン

も小さな真珠のペンダントをフィーダに付けてもらった

「よく、似合うよ。ラルー」

「さすがクラスの見立てだな！ラルーの髪に凄く映える髪留めだよ。よかったなラルー。ラインもかわいいぜ。さすが俺の妹だ」

「「ありがとう」」私とラインは満面の笑顔でお礼を言った。

それから、サラマンダーの火の曲芸を見たり、ホビットの屋台に行ってみたりと楽しい時間を過ごした。

そうこうしているうちに、竜のパレードが始まりどっと人混みが押し寄せて来た。

「きゃあ！」

「ラルー、こっち！」

クラスが手を伸ばし、私を引き寄せようとしてくれるが人が間に何人も押し寄せ届かない。

私も一生懸命手を伸ばしてもクラスの手がどんどん遠くなり、遂に一人になってしまった。

ど、どうしよう…

人が多くて兄妹達の姿すら見えない。というか人の多さに増々押し出されてしまい、一体ここが何処なのかもわからない。

「クラス！フィーダ！ライン！」

大声を上げても、群集に掻き消されしまい、全く届かない。

どうしよう。どうしよう。どうしよう。

周りを見回しても、知らない場所だし、知ってる人もいない。

母様、おばーさま、クラス、フィーダ、ライン、カル！会いたいよー。

心細さでいっぱいになり、涙で視界がぼやける。

いやいやいや、ここで泣いても何にもならない。とにかく皆を探さなきゃ！

キョロキョロと周囲を見渡しながら場所を移動していくが全く見当たらない。

更に、小1時間くらい探し足がクタクタになったが、クラス達の姿を見つけられない。

足が痛い…。ちょっとだけあの木陰で休んで、また探そう。

そう思って、大きな木の下に行き座った。

「みんな、どこ行っちゃったんだろう…」俯きながら独り言をつぶやいてしまった。

私、相当まいってるわ…

「ねぇ、君さっきから同じ所をグルグル回ってるけど迷子かな？」

いきなり声をかけられ上を向くと、人懐っこい顔をしたエルフの青年が立っていた。

年の頃は、私より少し年上かな？人間の年で言えば１３、４才くらいの黒髪、青い眼だけど、エルフにはめずらしく、眼鏡をかけていた。

「いえ、休んでいただけですから大丈夫です。ご心配なく。」

さっきのバカ兄妹の例がある。ハーフエルフは純血エルフから蔑まれる傾向が高い。

（おじーさまも初めて会った時はそうだったし）

警戒するに越した事はない。

「そんなに警戒しないでよ。しばらく君を見てたけど、ずっと誰かを探してるみたいにキョロキョロしてたじゃない？家族とはぐれちゃったの？」

彼は私の前にしゃがんで目線を合わすと、警戒心を吹き飛ばすような優しい笑顔を向けた。

この人いい人かも？

いやいやいや…人さらいは、笑顔で近づいて言葉巧に相手の警戒心を解いて誘拐するって、フィーダの事件があった後、母様と父様が熱弁してたわ。

ダメ！！こんな言葉に流されちゃ！信じれるのは家族だけ！

「本当に休んでいるだけですから。家族とは待ち合わせをしているだけです。あら、時間だわ！では、私はこれで…」

笑顔でそう告げると足早に立ち去った。

いやぁー危なかった。しかしあいつのせいであんまり休めなかったなぁ。
いや、今はクラス達を探すのが先決！頑張れ私！
痛む足にムチを打ち、さらに兄妹を探した。

…。

……。

……が……やっぱり見つからない。日も陰ってきている。母様達も心配してるかな？っていうか絶対に母様に怒られる！そっちの方が心配になってきた…

「ねぇ、やっぱり君、迷子でしょ！」

いきなり肩を捕まれ振り向くと、さっきの黒髪青年が心配そうな顔をして立っていた。

「つ、つけてたの？」
怖い、何この執念深さ！まさかのストーカー？
いや、私の顔ではストーカーはないか。

「プフ！（笑）
つけてるなんて、人聞きが悪いな。家族と待ち合わせなんていうからすぐに会うと思ってたけど、またグルグル同じ場所を歩いてたから、迷子だって確信しただけ。
顔色が悪いね。疲れただろ？
さっきね、天界人の屋台で空味の飴玉買ったんだ。食べる？
すんごく、おいしいよ。」

青年は雲のような生地でできている、布を取り出し、包み開いた。

すると中から、色とりどりの飴があり、それをこちらに差し出した。見た事のない綺麗な色の飴で凄くおいしそう。そう言えば、お腹空いたわ。でも知らない人から物を貰うのってちょっとな…

飴を貰うか貰わないか躊躇していると、彼は、包んでいた布の中から1つ飴をつまんで口に入れた。

「うん、うまい！甘酸っぱくてうまいよ！夕日の味だね」

「え！夕日味！？
夕日味ってどんな味なの？
今、どの色の飴食べた？」

「このオレンジと黄色のグラデーションになったヤツだよ」

青年は飴を再びつまむと私の口に入れた。

「ん！！！！……
おいしーい！凄くおいしい！疲れが吹っ飛んじゃう！」

あまりのおいしさにうれしくなり、ニコニコとしばらく青年と微笑んでいた。

はっ！！いかん。お腹空いてたのと、疲れと好奇心で頭回ってなかった…。私ってば、何知らない人から、飴貰って懐いてるの！バカバカ。

「ハハハ！君はクルクルと表情が変わる子だね（笑）別に僕は人さらいでも犯罪者でもないから安心して。」

「本当に？」

「家族の名誉にかけて誓うよ。それでも信じられないなら、命をかけてもいい。」

「…わかった。あなたを信用する。私はおっしゃる通り、兄妹とはぐれて今、迷子なの。
一緒に兄弟達探してくれる？」

「やっと信用してくれた！
信じてくれて、ありがとう。
かわいい女の子の頼みとならば断れないな。顔色も少し良くなってきた！
今まで心細かったんだね。もぅ大丈夫だよ。」

彼は笑いながら私の頭を優しく撫でてくれた。

この人、本当にいい人なのかも…

その7

「さて、では早速、君の兄妹達の身体的な特徴を教えてくれるかな？」

「身体的な特徴！？

えぇっと、兄のクラスは、金髪碧眼。弟のフィーダは、ダークブロンドで目は黒。

私とクラスとフィーダは、三つ子だから背丈は私と同じくらい。妹のラインは、肩までの長さの金髪で茶色の目。背丈は私の鼻くらいかな。」

身振り手振りで特徴を伝えると青年はニコリと笑った。

「よく、わかった。ちょっと待ってなよ。」

青年はピィーと口笛を吹いた。

すると、一羽の鷹が空から飛んできて、青年の肩に止まった。

「＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊」

よくわからない言葉で鷹に話しかけている。

何なの一体この人？！

すると鷹はコクリと頷き、再び空に飛んで行った。

一部始終を見続けていた私はポカンと口が開きっぱなしだったようで振り返った青年が私の顔を見て笑った。

「アハハ！凄いマヌケ顔してる。さて、これでしばらくすれば兄妹に会えるから暇つぶしに屋台でも見ようか？」

狐につままれたような気持ちを抑えて青年に促され屋台を見て回った。

「あ、あそこにおいしい、雲の綿飴が売ってる！凄くおいしいからご馳走するよ。買っくるからちょっと待っててくれる？すぐに戻るから動かないでね」

そう言うと青年は、足早に綿飴を買いに走って行った。

本当にいい人だわ。そう思いながら青年と綿飴が来るのを待っていると背後から甲高い声がした。

「貴方達に乱暴をはたらいた者は、この赤毛なの？」

なんなの今日は！？

人の事を赤毛赤毛と呼ぶなんて。厄日か？

ギロっと睨みながら振り向くと、さっきのバカ兄妹とその親類と思われるプラチナブロンドの女の人がいた。

なんで会いたい家族には会えず二度とお目にかかりたくないバカ兄妹に会うんだろう。きっと私の今日の運勢は最悪なんだ…

「そうよ母様、このハーフエルフが私達を馬鹿にしたのよ！」

バカ妹が意地悪そうな顔をして隣に立っている女に顔を向けた。

ってことは、この甲高い声の人はバカ兄妹の母親か。道理で意地悪そうな顔してるわ

「おい、お前の汚らしいハーフエルフの兄妹は、見当たらないな？もしかしてお前、一人なのか？さては、貧乏過ぎて捨てられたのか？ハハッざまあみろ！」

全くうざすぎるこの家族…

「スタンリード、およしなさい。ハーフエルフなんかに口をきくのは。貴方の価値が下がってしまうわ！」

なんなのよ！このクソ親子。いちいちムカつい言い方ができるとは、凄い才能だわ。

まぁ、私も今日は言われっぱなしで我慢できる程、心の許容量超えてますので、あえて言わせていただきます。

「なんなんですか？いちゃもん付けてきたのは、そっちでしょ。これ以上、私に付きまとわないでくれますか？うっとおしいにも程があるわ。」

お馴染みのニッコリ笑顔で返す。

「まぁ、なんて下品な口の聞き方をするんでしょう。私達を辱めた愚かさを教えてあげようとしているのに。

あら？貴方の汚れた髪には似合わない髪留めなんてつけて。どこで盗んだの？」

バカ妹がほざいた。マジで蹴り倒してやろうかこいつ…

そう思っていると、バカ兄貴の方が乱暴に私の髪から髪留めををむしり取った。絶対髪の毛が何本も抜けた！

「痛！！何するのこのクソ男、髪留め返して！」
思わずグーでバカ兄貴を殴るとそれがクリーンヒットした。
金持ちは、いじめる事はあってもケンカも何もした事がないヤツが多いから避け方も知らない。
伊達に兄弟喧嘩で鍛えてはいない私の腕っ節は、並の男の子より強い！
バカ兄貴は、私に殴られ尻餅をついた。ざまーみろ！
ふっと不敵な笑みでバカ兄貴を見下ろしていると突然、強い衝撃を受け後ろに体ごと吹っ飛ばされ、背中から地面に叩き付けられた。
「クハッ…」
地面に背中をしこたま叩きつけた衝撃で少しの間息ができない。
「…！！」
いかん！！
こんなとこで倒れっぱなしだと何されるかわかんない！
なんとか上体を起こして前方を見るとバカ母が私を魔法で吹き飛ばした事がわかった。
「ハーフエルフごときが私の大事スタンリードに何をするの！この愚か者！殺してやるわ」
凄い剣幕でバカ母が怒鳴る。
子供の喧嘩に親がしゃしゃり出るか普通！つーか、肩が物凄い痛い！何これ！

今まで体験した痛さを遥かに超える激痛がして痛みでクラクラする。しかも叩き付けられた衝撃で口の中を切っており只今、口の中は絶賛鉄の味中で気持ち悪い。

そんな鉄の味を気にならなくなる程、尋常でなく右肩が痛い！どうしたのかと思い腕を見下ろすと、あらぬ方向に右腕が曲がっていた。えええぇ！！う、腕が折れてる…。しかもバカ母、私を殺すってなんて物騒なの？本当今日は厄日って言うか命日になるの？

更にバカ母は、バカ兄貴がむしり取った髪留めを踏み付けて木っ端みじんにしてくれた。

殺す…。マジぶっ殺す…。

人の右腕折っといて、その上、クラスが私の為に買ってくれた大事な髪留めをよくも……。このクソ親子め。お前らに殺される前に殺してやる！

ゆっくり立ち上がり口の中の血を「ペッ」っと地面に吐き捨て口を拭う。このクソ親子、下町上がりを舐めんなよ…ぶっ殺す！

悪意を込めた念を貯めて親子にぶつけてやろうと集中した時

「お待たせ～！ってあれどうしたの？えぇ！！口から血が出てるよ。大丈夫？髪はボサボサだし、服に土がついてるし、何かあったの？本当にどうしたの？」

いきなり臨戦体制から引き戻され、かいがいしく世話を焼いてくれる青年が現れた。

青年は、私の服に着いた土を払おうとして、服をパンパンと優しくはたく。叩く手が右肩に触れた瞬間

「ギャー！！いったーい！」私は悶絶しながら腕を庇ってしゃがみ込む。
頭が痛くなるくらいの痛さと熱さで意識がボーッとする。

さっきまも痛かったけど、怒りでアドレナリンが出てたらしく、応戦しようと思えるくらい痛みを我慢できてたけど、頼れる人が現れた途端、体は正直で痛みを全面的に感じるようになった。その上、折れた腕を軽く叩かれたら、そりゃ悶絶物ですよ。

「え！！腕が…折れてる…。ちょっと見せてみて！」
青年は私の腕を見ようとするが、悶絶中の今は体を少しでも動かそうとするだけで脳天に響く程痛いので、ただ首を横に振り「今は無理」とジェスチャーで伝えるのが精一杯だ。

「誰にやられた？」

青年は一瞬驚いた顔を見せたが直ぐさま真剣な顔をして私を抱き寄せた。

その8

「流石、人間の汚れた血が入っているハーフエルフの娘だわ。男をそそのかして自分の庇護を得るなんて。幼いのに娼婦の振る舞いが板についているのね。いいわ、その男共々消し去ってあげる。」

バカ母が罵声を浴びせる。

この人を人とは思わない言動。怒りと肩の痛さでクラクラするが、言い返す気力もなく、痛みが和らぐのを待とうとして、体を青年に預けたまま、目をギュっと閉じる。

「貴方達がこの子を傷つけ、あげく腕を折ったんですか？」

青年は私を抱き起こしながらバカ親子に厳しい目を向けた。

「この野蛮で薄汚いハーフエルフが息子を殴ったのよ！ハーフエルフの分際でエルフの貴族に手を挙げるとは、死に値する行為だわ。だから然るべき処置をさせてもらうだけよ」

すると青年はため息をつきながら言った。

「子供の喧嘩に親が出てきて、あまつさえ、殺そうとするなんて、とんだ貴族もいるもんだ。恥を知りなさい。」

低く冷たい青年の声が響く。

「ハーフエルフに騙される愚かな男が私に説教とは…。愚か者同士仲良く死になさい！」

そう言うと、キレたバカ母は、呪文を素早く唱え手の平の中に光りの玉を作ると、それをこちらに投げつけた。

ドォーンという地の底を揺るがすような音と共に空気がビリビリと揺れる。

すると一気に上から何十倍もの重力が私達に襲い掛かり、圧死させようとする。

「キャアー」

思わず叫んだ次の瞬間、ふっと体が軽くなる。ゆっくり目を開けると、私達の周りの地面は数十メートルに渡り陥没しているが、我々は温かな光りの中にいて何ともない。

幸い、巻き込まれた人もなく、立ち並ぶ屋台にも影響が無かったのでケガ人もいないが、さすがにここまでのハイクラス魔法を道端で使ってしまうと注目の的になるが、皆バカ母が恐ろしく遠巻きで見ている。

「馬鹿な…私の最大級の呪文が止められるなんて…」

バカ母はおそらく彼女が持っている魔力を総動員して、私達を殺すための呪文を使ったらしく、力を使い果たしてしまい、立っていられず地面に膝をついた。

「「母様！」」

バカ兄妹が母親に駆け寄る。

バカ母は、驚きと力を使い果たした事で顔色は相当悪い。

（顔色の悪さでは、バカ母に腕を折られた私の方が確実に悪いと思うけど…）

「先程の呪文が貴方の使える最大級の呪文とは…弱すぎてかける言葉もありませんよ。」

青年が悲しい表情でバカ親子を見下す。

何この人、さっきまでの柔らかキャラとは全然違う！
なんかちょっと、怖い…

「貴方が先程、私達を殺そうとした魔法の威力は……こんなものですかね？」

青年は手の平にバカ母が作った光の玉を出した。見ると明らかにバカ母が投げて寄越した、2倍くらいの大きさだ。

「じゃあ、お返しです。受け取って下さい。」
青年は、光りの玉をバカ親子に投げつけた。

「「「「きゃあぁぁぁ」」」」
バカ親子の断末魔が響く。
一瞬にして目が開けていられない激しい光が周りを包み、バカ親子の姿は光で見えず、その周囲は、激しい光のせいで逆に闇に包まれた感覚を覚えてしまう。

青ー年ー！！優しい顔して親子共々消し去ったの！
いや、そりゃバカ親子だけど殺してしまうって…
あまりの事に私はワナワナと体が震えた。

「ちょっ…」口を開いた私は青年から離れた。
「殺す事ないじゃない！この人でなし。」
私が怒鳴ると青年はゆっくりバカ親子達がいた場所を指をさした。
何のことかわからずその方向を見ると

眩しさにボー然としている親子がそこにいた。

「人を殺そうとする時は、自分が殺されるかも知れない事を覚悟するものだよ。」青年は、平然とした顔で言った。

な、なんなんですか？この人は……。

その9

「あっ！！ラルー！！！！
母様、おばーさま！ラルー発見！ラルー発見！」

今まで緊迫した空気を全く無視した、素っ頓狂なフィーダの大声と共に、母様とおばーさまとフィーダが人影から現れた。

「ラルー！ラルー！もぅ、どこにいってたの！心配して死ぬかと思ったでしょ！！」

泣きそうな顔の母様が猛烈な勢いで走って来た。私に会う事に夢中で周りに目が行って無かったらしく、ボー然としているバカ母を踏み付けて、私のもとまで走り、思い切り抱きしめられた。

「ギャーーーー！」
腕が折れている事を知らない母様が力いっぱい抱きしめたので激痛が走り思わず白目になる。

「え！？な、何？何？何？どうしたの？」

か、母様、お願い…離して…

あまりの痛さで口をパクパクさせていると、
「あのぅ、お嬢さん右肩が折れているので離してあげた方がいいと思います。」

青年は母様と私の激しい再開の姿に驚き戸惑いながらも、痛みのため口が聞けない私に代わって母様に忠告してくれた。

「は？？？え？？？ラルーの腕が折れてる？……うそ！」

そう言って私を離して肩の様子を見る母様。

母様。母様に抱きつかれてから離されるまでの間に私、死んだ父様が綺麗なお花畑の中で元気に手を振ってる映像が見えた気がする…

「…本当だ……。折れてる……。……。

ラルー誰にやられたの？」

もの凄くニッコリ笑顔で母様が私に聞く。

か、母様。その前にお願い！！私に治療をしてぇぇぇ！

報復の前に治療を！！

「キャーーー！

ラルーの腕が！腕がぁぁぁ！

ラルー、一体誰にやられたの？かわいいラルーにこんな仕打ちを…。

ラルー、おばーさまが必ず敵をうってやるわ！」

おばーさま……。いつも冷静沈着なおばーさまだったらまず最初に治癒魔法をかけてくれると思ってました。

しかし、まず報復とは…。やっぱり母様の母様だわ。根っこは同じ血が確実に流れてる。

「ちょっとあんた！ウチの姉貴に何したんだよ！」

フィーダが敵意剥き出しで青年に迫る。

「フィーダ！違うの。この人は迷子になった私にフィーダ達を探す事を手伝ってくれたり、バカ親子から守ってくれたのよ」

私は事の顛末を母様達にざっと話した。途中何度も母様とおばーさまとフィーダがバカ親子をしばこうとしたがその度に私と青年が止めだ。

これ以上、危害を加えれば本当にバカ親子は、冥土送り決定だ！言動には凄くムカつくが、殺すなんて、絶対ダメ！

「僕が懲らしめておいたので、十分ですよ。2、3日は意識がはっきりしない廃人状態が続くと思いますので、後で警備隊に彼等を保護するように言っておきますから」

母様達の怒りを見て青年が柔らかな笑顔で告げる。

マジでこの人怖いわ……

しかしウチの家族は青年の懲らしめた行為に（特に廃人にしたという部分。2、3日だからね！2、3日！！）いたく感動し、次々と青年とハイタッチをしていった。

おばーさま！おばーさまもハイタッチですか！

つか、絶対に意味わからずに母様とフィーダの姿を見て真似しただけでしょ！

あまりの事にこの光景を受け止められません、私。

「本当に娘に良くしてくれてありがとうね。感謝しても仕切れない

わ」

母様が優しい笑みで青年にお礼を言った。

「僕にも彼女と同じくらいの妹がいるから、一人ぼっちになってる彼女が心配になってした事ですし…」

「いいえ！貴方がいなければラルーが殺されてたかも知れないわ。本当にありがとう！感謝しても仕切れない。あ、そうだ！！今度、貴方のお宅に伺って貴方のお父様とお母様に改めてお礼をさせていただくから、お名前と住所を教えてくれる？」

「お礼だなんて…。本当に結構です。こんな事、父に知れたら出しゃばることをするなと怒られてしまいます。お気持ちだけで十分ですよ」

「そんなぁ…。私の息子達が貴方みたいに女の子を助けたら、息子の事を凄く誇らしく思うけど。ねぇお母様？」

「ええ。親なら当然、息子の勇敢な行動はうれしく思いますよ。私からも心からお礼をいいます。孫を守っていただいて本当にありがとう！」

「僕の父は、残念な事に普通じゃないんです…。すいません。本当にお気持ちだけで十分ですから。それじゃ、僕はこれで！」

青年はその場から立ち去って行った。名前も名乗らぬ不思議な人だったな。自分の家族に、なるべく合わせたくない様子だったけど…

「あれ？ラルー、クラスに買ってもらった髪留めは？」

フィーダに突然聞かれた。

「あ、あれ…バカ母に踏み潰されちゃった……。凄く気に入ってたのに。あぁ、クラスに何て言おう」

「あのクソババァ～！蹴り入れてやる」
フィーダが怒ってボー然としているバカ親子のもとに行こうとする。

「やめて！フィーダ！ムカつく親子だけど、今は廃人だって、あの人言ってたじゃない！
何もできない相手を蹴るなんて非常識よ！」
私は必死にフィーダを止めにかかる。母様とおばーさまに目線を送り一緒に止めてもらうように催促すると

「フィーダ、やるなら早くやっちゃっいなさい！」

「おばーさまは、後ろを向いていましょうかね。フィーダが今からする事は、おばーさま見えなくってよ」

母様、おばーさま…貴方達に頼った私が馬鹿だったわ！

「ダーメ！フィーダ！お願い、やめて」
私が体を張って止める

「あのぅ…」
ギャーギャー騒いでいた私達におずおずと誰かが声をかけた。
皆、その声の主を見ると、さっき去って行った青年がいた。

「言い忘れましたが、早くお嬢さんの右肩の治療をしてあげて下さ

いね。では、本当に僕はこれで…」

そう言って再び立ち去る。

腕の治療…。母様やおばーさまやフィーダを止めるのに必死で痛みを忘れてた！青年に右肩の事を言われ嫌でも意識が痛みに向けられる。

「いっっ！！！たぁぁぁーい」フィーダを止めるのに必死で痛めた腕を上げた為に更なる痛みが私を襲った。

痛みに悶えながら、ぼんやり去っていく青年の後ろを見やると空から、先程の見た鷹が降りてきて青年の肩に止まったのが見えた。

その１０

おばーさまにその場で治癒魔法をかけてもらい、とりあえずの応急処置を受け、すぐに馬車を呼んで家に帰った。

馬車の中でクラス達の姿が見えないからどうしたのかと聞くと、私を探す為に、小さな子供を見ながらだと探せないので、ラインとカルを屋敷に帰す事にしたらしく、付き添いでクラスも一緒に先に帰らせたという。

屋敷に着いたら直ぐに医者を呼んで、腕の治療をしてもらった。どうやら、エルフは長寿の割には人間に比べて傷や病気に弱いらしい。

けれど、幸か不幸か私はハーフエルフの為、骨が折れてもエルフよりもダメージが少ないらしく（骨折が中々治らず死んでしまうエルフもいるみたい）骨を再生する呪文も直ぐに効いた。

まぁ、効いたと言っても折れた骨が薄く、くっついているだけでしばらくは安静にしなきゃならないらしいけど。

しかも2、3日は骨が折れた事と治癒魔法の反動で高熱が出るとの宣言つき…。もちろん、宣言通りの高熱が出てきましたとも。あぁ苦しい…

しかも私の安静を確保するため、兄妹達とは別室に移されてしまった。しかーし、私が不安にならないよう母様とおばーさまが交代でずっと側に付いていてくれている。

クラス達には悪いけど、母様とおばーさまを独占したようでうれしいなぁ！腕を折ったかいがあるかも。

今はおばーさまがついてくれてお昼を食べさせてくれた。

私が食べ終わってしばらくするとコンコンと部屋の扉を控えめにノックし、クラスが入ってきた。

「おばーさま、僕がラルーに付いていますからお昼を食べてください。母様は、お仕事が立て込んでしまってすぐにはこちらに迎えないらしいので、僕が代わります。」

「あら、そんな時間かしら？そうね、そうしましょうか。ラルー直ぐに戻りますからちょっと待っていてね。クラス、それまでラルーの事お願いね。」

そう言っておばーさまが部屋から出て行った。

「ラルー、熱は下がった？」

心配そうな顔したクラスが私のおでこを触って熱を確かめる。

「まだ、結構あるね…。大丈夫？辛くない？欲しいものがあったら言うんだよ」

そう言いながらクラスは優しく頭をなでてくれた。

私は、クラスに対して悶々としている事を口にした。

「クラスごめんね。心配かけて…。それにせっかく買ってもらった髪飾りを壊しちゃって……本当にごめんなさい」

「あれは、ラルーのせいではないもの。気に病む事なんて全くない

よ。また今度買ってあげるから気にしないで」
そう言ってクラスは優しく私の頬をなでてくれた。
もぅなんて優しいの！大好きな兄様だ！

「ありがとう」
私はクラスに微笑んだ。

そして、ずっと不思議に思っていた事をクラスに聞いた。

「ねぇ、なんで母様達は私の居場所がわかったの？」

「実はね、ラルーと別れた後、ラルーを散々探したんだけど見つけられなかったんだ。
けど、しばらくして母様達とは出会えたから、事情を説明してる時に突然、空から鷹が降りてきて、僕達に何か言いたげに、しきりに鳴くんだよ。

最初は何なのかよくわからなかったけど、しばらくして母様が鷹の後を追ってみようと言い出して、おばーさまとフィーダとで鷹の後を追って行ったんだ。

そうしたら、まさかのラルーが居たってわけ」

クラスがクスクスと笑いながら答えてくれた。

「鷹が！？
あのね、私を助けてくれた人が鷹を呼んだと思ったら、よくわからない言葉で鷹に話し掛けた後に鷹が飛んで行って、その後に母様達に会えたの！」

興奮した私が支離滅裂の言葉で説明すると、さすが生まれた時から一緒にいたクラス！言いたい事をわかってくれた。

「…。って事はさ、その人、鷹と話せたんだね。
昔、読んだ本に古代のエルフは、動物と話せたって書いてあったな。だけど、今は、その能力が薄れていってるみたいで、殆どのエルフは動物とは話せないんだ。
ただし、一部話せる人達も極わずかだけど残っているんだって」
「へぇ～そうなの。じゃあ、あの人は珍しいエルフなんだね」

まぁ、眼鏡かけたエルフ自体今まで会った事無いから、珍しい体質なのは、そのせいなのかも。

エルフは一概に目が非常にいい種族なので人間みたいに眼鏡をかける人を私は見たことがない。

「その一部の人達はどんな人達なの？」

「動物と話せる能力を重要視して、話せない者達との交流を避けて辺境の地で少人数で暮らしている一族が数グループいるみたいだよ。まぁ、古代の能力を絶やさないように血族結婚をしている人達がいるって事だよ」

「じゃあ、私達は絶対に動物と話せる能力なんて持てないよね！」

「エルフの血が半分しかないからね。でもさぁ、傷や病気に対する生命力や体力は、エルフ以上に強いんだから、それに感謝しようよ」

「うん！」

バタバタバタ、バターン！
クラスと微笑みあっていると廊下からけたたましい音と共にカルとラインを小脇に抱えたフィーダが入ってきた。

「クラスだけラルーに会うなんてズリぃーよ！チビ達だってラルーに会いたいよな？なぁ？」

フィーダの問い掛けにラインは泣きそうな顔でこちらを見る

おそらく無理矢理フィーダに連れて来られたんだろう。

「ねぇたま！ねぇたま！だっくぅだっくぅ」
小さなカルがフィーダの腕から逃げようと身をもがき、私に腕を伸ばし抱っこしてとねだる。

げ、激カワ！
「カ～ル～！ねぇたまも会いたかったよ！」
腕を固定しているのでカルの事を抱っこできない私に気を使い、クラスがカルを抱き上げた。
小さな手で一生懸命頭を撫でてくれる。

「ねえたま、いたい、いたい。どっかいった？」
あぁ癒されるわぁ…
「うん、カルのおかげで大分良くなったよ！ありがとう」

「姉様、早くよくなってね」
ラインがフィーダの拘束からやっと逃れられたらしく、怪我をしていない方の手を握ってかわいい顔で聞く。

「ラインもありがとうね。もう大丈夫だよ！治ったらまた一緒に遊ぼうね」

「やっぱり、家族の力は凄いよな！ラルーの顔色が俺達が来る前より格段に良くなってる！」

フイーダがエッヘンと威張りながら言った。

「馬鹿か、お前は…ラルーの熱が上がったんだよ。

さぁ、お見舞いが済んだら早く出てけよ！ライン、カル、もうちょっと我慢してね。

そして、ラルーはちょっと寝る事！さぁさぁ、各自、言われた事をしっかりやる！」

クラスが仕切だすと皆、有無言わずに従わざるをえない。

私は仕方なく寝ることにした。

その11

どのくらい時間が経ったのだろう。

目が覚めると真っ暗だった。窓に目を向けるとカーテンが閉じられているから、おそらく夜だろう。きっとよく寝ているから私を一人にしてくれたようだ。

起き上がるのも億劫なので横になったまま天井を見上げる。

……。

……。

……。

さ、寂しい…誰か来てぇ～

暗いのは平気だけど、こうも静かだと逆に落ち着かない。

ねぇ、誰か様子を見に行こうと思う人はいないの！

しかも右手を固定されているから寝返りすら打てない。

どんだけ頑丈に止めてるんだよ！少しイラッとしながらため息をついた。

早く皆と一緒に寝たいよ…

物心ついた時には、周りに必ず家族がいる騒がしい環境だったから寂しいって思うことが無かったし、逆に早く独立して一人になりたいと願っていた。

けど、いざ一人になってみると（一人といっても、今は一人で寝るだけだけど）寂しくて落ちつかない。

自分ではない誰かと一緒にいる事は私にとっては、落ちつける環境だったんだなぁ。

しみじみ思っているとジワっと涙が出てきた。いかん、いかん！独り寝ごときでホームシック（？）にかかるとは…私、まだ熱が高いのかなぁ。

ガチャ

扉が開いて誰かが部屋に入ってきた。
やばい！赤ちゃんでもないのに泣いてた事がばれる！すかさず、目を閉じて寝てるふりをした。

コツコツと足音が近づいてきた。

誰だろう？母様かな？

うっすら薄目を開けて見てみると、そこに立っていたのは、なんとおじーさまだった。

ヒィェェェー！おじーさまと二人きりになるのは、笛の稽古をサボった時以来だ！
気まずい事この上ない！寝たふりを続けて嵐が去るのを待つのみ！

心臓がバクバクしているが、それを悟られないよう、規則正しい寝息を繰り返す。

はーやーくー出てって！夜遅くにレディの部屋に入ってこないでよ！！

母様！たすけてぇぇ！！！敵が！敵が攻めてまいりました！私を避難させてください。

いくら心の中で強く念じてみても、もちろん助けが来るわけでもない。

こちらの心境に気づく事もなく、おじーさまはベッドの隣にある椅子に腰を下ろして私の寝顔を眺めている。

頭の中は警報が鳴りっぱなしでひどく動揺して焦ってしまい、私は鼻と口から同時に息を吸い

「ンゴォォ」と盛大ないびきをかいてしまった。

最…悪

ただでさえ、お祭りで迷子＆一悶着を起こして腕を折り、その上に盛大ないびきをかく孫娘って…

最悪だわ。。

「驚いた。いびきまでもが、デニールとそっくりだとは…」

おじーさまは、嬉しそうに小さな声でつぶやくと、私の頬を人撫でした。

はっ？デニール？誰それ？

デニールは本物のいびきかもしれないけど、私は緊張のあまり呼吸

が乱れて結果、いびきになっただけだから！
根本がもうデニールとは違うからね！

心の中でツッコミながら寝たふりを続ける。

「デニールよ、お前は姪の姿を借りて私の元に戻ってきてくれたのか？？

私の事を許してくれたのか…
それともまだ怒っているのか？」

おじーさまが私の寝顔に向かって小さな声で話しかけた。

何？何？何？
寝てる孫に向かって何訳のわからない事言ってきてるんですか？！
何これ、無茶苦茶怖いんですけど！！
一刻も早く、立ち去ってくれ！

その思いも虚しくおじーさまは椅子に座ったまま、私を黙って眺め続けた。

ー1時間経過ー
おじーさま、しつこいにも程があるわ！本当にお願いだから、帰って！

ー3時間経過ー
黙って人に寝顔を見続けられるって、こんなにもプレッシャーにな

るなんて、初めて知った…。辛い…

ー5時間経過ー
ねぇ、これ何プレー？

ー6時間経過ー
……。死にたい…。

チュン、チュン！小鳥の軽やかな囀りと共に部屋の中に太陽の柔らかな朝の日差しが差し込み部屋を明るく染める。

「ラルー！おはよーう！
昨日は仕事で相手できなくてごめんね！今日は、お父様に仕事押し付けるから母様と一日一緒にいようね！って、うわあぁぁぁぁ！
ラルーの枕元に、し、し、死神？！」

母様が元気よく朝の挨拶をしに部屋に入って来ると予想しなかったおじーさまの姿に度肝を抜かれ、黒い服を来ていたおじーさまを思わず死神と間違えた。

「何がおはようだ！
病に伏している娘をよく寝ているからと言って夜中に一人にするなんて！お前はそれでも母親か！？恥を知れ、恥を！」

「えっ！って事はお父様、ずっとラルーについていてくれたの？」

母様違う。ついていたんじゃなく監視されてたのよ…

「い、いや…、さっき通りかかって様子を見てただけだ。私はもう行く。」

おじーさまは立ち上がると部屋から出ていった。

「へぇ！お父様も良いとこあるじゃない。
ねぇ？ラルー！…ラルー？どうしたの？何シクシク泣いてるの？え？え？」

やっとおじーさまの愛情ある監視から解き放たれ喜びと今までの数時間に及ぶ苦行に思わず泣けてしまった。

もちろん、この精神的なストレスでこの後、熱がしばらく続いたのはいうまでもない。

その12

やっと骨がしっかりとくっつき、お医者様から兄妹や母様と同じ部屋で寝起きをしてもいいとお許しが出たのは、新年をあと2日残した頃だった。

良い機会だからと、そのまま一人部屋を与えられそうになったが、まだいらないと断固拒否をし、晴れて昨日から狭いベッドで親子六人「州の字」で寝ていた。

あぁ、この狭さから生じる密集度合いが冬場は暖かくていいのよね。フィーダの寝相の悪ささえも一人じゃないと実感できて、ある意味快・感…！

侍女さん達に起こされ支度を整えると、食堂に向かう。食堂では既におばーさまとおじーさまが定位置に座って朝食を食べていた。

「「「「「「おはようございます」」」」」」

「皆、おはよう。ラルー、久しぶりの六人一緒のベッドはよく寝れたかしら？」

微笑みながらおばーさまが聞く

「はい！ぐっすり寝れました。」

私は、元気よく答えた。

朝食が運ばれ食事を取っていると、コーヒーを飲みながら珍しくおじーさまが口を開いた。

「明日の大晦日、皆出かけるからそのつもりでいなさい」
そう言うとおじーさまは出ていってしまった。

何？出かける？？どこへ？

私達兄妹の顔には「？？？」という表情が浮かんでいる。

「もう、クリスラー（おじーさまの名前）ったら言葉が足りないんだから…。」

おばーさまが苦笑しながらおじーさまに文句を言った。

「あのね、明日は大晦日でしょ？毎年、大晦日になると国王が貴族とその家族を宮殿に招待して、新年を祝うパーティーを開くの。当然、今年は貴方達も呼ばれているから、皆で出席しましょうっておじーさまは言いたかったのよ」

おばーさまは、私達に満面の笑みを見せながら、おじーさまの言葉の補足をした。

「えええ！まだあの新年のパーティーやってるの？本当、国王も飽きないわね…。お父様とお母様で行ってらして。私達は、仲良くお留守番していますから！」

母様がさも嫌そうな顔でおじーさまの提案に拒否をした。

「必ず家族は出席する決まりなのよ。エルザも知っているでしょ？きっとお父様も貴方達を紹介するいい機会だと思っているのよ。あそこで貴族の面々に紹介する事で、この子達はサルン家の者と皆に

認識されるわ。
そうすれば、この前みたいな、変な輩に子供達が絡まれるのを防ぐ事ができるとお父様はお考えなのよ…。
これもお父様なりの愛情よ。わかってあげなさい」

いつになく、おばーさまの口調が厳しいので、空気がピンと張り詰めた。

「…でも…。……。
そうだわ！私達パーティーに来ていく服なんて持ってないもの。日頃お世話になってる、お父様とお母様に恥はかかせられないし…。
あぁ残念だけど今年は―」
母様が嬉しそうに答えた。

「安心なさい。今日、仕立屋を呼んで、今日中に仕上げさせるように言ってあるから、ドレスに関しては何にも心配いらないわエルザ」

おばーさまがニッコリ微笑みながら母様の話しに被せて黙らせた。

「ぐっ…」

おばーさまのダメ押しで母様とおばーさまの攻防は、一気におばーさまに軍配が上がった。

母様…母様の負けだわ。
今回の事に関しては、おばーさまが1枚も2枚も上手です。
さすが母様のお母様だけあって母様を黙らせる用意周到ぶりにに驚きを通り越して、一種の爽快感まで感じさせる。

でも正直、エルフの貴族ってあのバカ親子みたいな人達ばかりっぽ

いから気持ちとしては行きたくない。

しかし、私達が今いるパチーノの国王様かのお呼ばれなら行かざるを得ないか…

あぁ気持ちが重いよ。

その１３

朝食を食べ終わると私達は採寸や生地選びで一気に忙しくなった。
私達６人の服を作るべく呼ばれた仕立屋さんの数は述べ１００人程。
私達兄妹は、大きな部屋の一室に通されると、ほぼ下着姿に近い恰好にされ次々に体のあちこちを採寸された。
ちなみに母様は、隣の部屋で母様の子供の頃から服を仕立ててくれているなじみの仕立て屋を呼んでドレスを作っている。
まぁ子供用の服と大人用の服の生地も違うから、ごちゃごちゃにならないような配慮なんだろうね。
採寸が終わると私達一人一人に生地が宛がわれ、それをおばーさまが見て片っ端から判断を下していった。
「クラスにはもっと深い色の方が似合うから浅黄色は却下！
うーん、カルはもっと上品で明るい色が似合うわ。そこの奥の生地を持って来て見せてみて。
……。そうね…なんかイメージと違うかしら…次の生地を持ってきて。
まぁ、ライン！その薄紅色の花柄の生地は、貴方の美しさを存分に引き出すわね！その生地でドレスを作ってちょうだい。
あらあら、フィーダ、じっとしてなさい。えっ？くすぐったいの？
うふふ、我慢よ我慢。男の子は何事にも我慢が肝心ですよ（笑）

あっ、ちょっとそこの貴方！ラルーは私と同じ瞳の色だから明るい緑はやめてちょうだい、似合わないから。。
あら！やだわ。だからといって髪に合わせて、赤色なんて、あまりにも芸がなくてよ！それも無し。早く下げて。
髪の色が濃い赤だからやっぱりこの子にも深い色があうかしら。右の生地を併せてみて！…。却下！次を見せて！」

おばーさまは、いつもの優しい雰囲気が全くなく、まるで鬼軍曹のようなキビキビとした指令を仕立て屋さん達に繰り出し、私達に似合う生地を見ていく。

でも、なんかいつもより、生き生きしてる気がする

ようやく生地が決まると、次は怒涛の型選びと細かいチェックが待っていた。

「その型でいいけど、もっとフィーダの襟にギャザーを寄せて、そう！そんな感じね。

ラインの裾は、色を変えた方が動きがでるわ！この布に合う生地を持ってきて！

ラルーの袖を後１ｃｍ膨らませてちょうだい

クラスの靴はもっと先が細い方がいいわね

あら！カル良く似合っているわよ！でもズボンの裾は、そんなに膨らませないでちょうだい」

ほぼ一日中、おばーさまの指示のもと着せ替え人形状態の私達は、

全てが終わる頃には皆ぐったりと疲れ果てていた。

後で聞いた話しだが、おばーさまは、結婚する前に自らのブランドを立ち上げる程にファッションセンスが大好きなんだそうだ。おばーさまがデザインし、売り出した洋服は貴族のみならず全世界に流通し、人気を博したという。

それをおじーさまとの結婚を期に一切やめ、今では当時出した服が高値で取り引きされるほどのプレミアが付いているという。

ファッション業界から引退した今でも「サルン夫人」と言えばファッションリーダーとして注目されており、見立て上手なおばーさまは、パーティーシーズンになると貴族の奥方から見立てて欲しいという依頼が殺到し、引っ張りダコになるという輝かしい経歴の持ち主だった。

やっと大仕立て大会から解放され、夕飯を食べる頃には、疲れがピークに達し、重い身体を引きずって食堂に入ると、そこには、おじーさまがいた。

「今日は、お前達と私だけの夕食だ。さぁ、食べなさい」と言い食事を促した。

しかし、本音を言えば疲れきっていた私達は、食事を取ることさえ忘れて眠りたい！

でも、そんな事おじーさまには言えないので、ノロノロと食べはじめた。

食事を始めてから1分後……

ウトウトしてスープの中に顔を突っ込む者、サラダを食べてる途中で意識を無くし口から葉っぱを出しながら寝てしまった者、パンを食べている途中で寝てしまい、パンを握りながら昇天した者、口を動かしながら寝てしまい、重心が後ろに傾き椅子ごと転がり落ちる者など、食べながら多彩な寝方を見せる子供達。

その光景を見て思わずスープを吹き出したおじーさま。

な、なんだこの子達は!?何かの呪いでもかかっているのか!?

「誰か!誰かいないか?」

シーン……

はっ!!そうだった!アビゲイル（おばーさまの名前）から言われていた事をすっかり忘れていた!

＝1時間前＝

「クリスラー、ちょっとよろしいかしら?貴方に折り入ってお願いがあるの…」

いつも穏やかに微笑んでいる控えめな妻から「お願い」とは…!?おそらく結婚してから初めての事じゃないか?

「お前から、お願いとは驚いたな。私にできる事であれば言いなさい。」

アビゲイルの顔がパアッと嬉しそうに綻んだ。

久しぶりに見るその表情に思わず自らの口が綻んでいる事に気がつくと、またいつもの固い表情を保つのに努めた。

「明日、子供達が着て行くドレスを今日中に仕上げてしまいたいの…。

腕の良い職人を手配したのだけど、この時期、どこの貴族もドレス選びに必死だから、手配できた職人の数だけでは、到底間に合わないのよ。

だから、屋敷の者達、総出でドレスの仕上げをさせていただきたいんです。

もちろん、貴方達のお食事の用意はするように言っておきます。ただ、その間、子供達と貴方で夕飯を取っていただけないかしら？エルザもまだ手が離せないから、夕飯には同席できないと思うし…。」

「別に構わんよ。」

「まぁ、クリスラーありがとう！子供達も聞き分けが良いし、クラスがしっかりしているから、多分、貴方の手間を取らせる事なんてないと思うわ。」

そんな会話を思い出す。

アビゲイルよ……。

心の中で妻の名を呼んでみる。

もちろん、状況は変わらないのでため息と共に立ち上がる。

「こ、こら！頭をスープ皿から出すんだ。うっ……顔がスープだらけではないか！今顔を拭くから。はっ！！袖で拭くのはやめなさい！

そこのお前はいつまで、口から野菜を出しているんだ。食べないなら吐き出せ。こら！聞いているのか？ペッしなさい。

そこ！椅子から転げ落ちてもまだ寝てるなんて聞いた事がないぞ！起きなさい！

お前達！食事はもういいから部屋へ戻り寝なさい！」

シーン……

なんだ。この子らは…。私の大声にもビクともせず寝ているとは…。こ、これがハーフエルフの力なのか？

仕方ない…。

手近なところから寝ている子供を抱き上げ子供部屋と食堂を往復し、子供達をベッドに寝かせる。すると1番小さな子供が目を覚まし寝ぐすりをしだした。

「こら、静かにしないか！お前の兄や姉が起きてしまうだろう」

しかし、幼い子供にそんな話しが、理解できる事もなく、増々激しく泣き始めた。

仕方なく、腕に抱き背中をさすってやる。しばらくすると、ヒック、

ヒックと泣き止み始めた。

柔らかい…。久しぶりに小さな子供を抱いた。
最後に子供を抱いたのはいつだったろうか…おそらくエルザが生まれた時以来だから、数何百年は経っている。

子供特有の甘い匂いを嗅いでふとそんな事を思い出す。

ギュッと首にまわされた暖かい手と肩の凹みに押し付けられる小さな顔が庇護欲を駆り立てられる。

デニールもエルザも幼い時に抱っこをせがんでよくそのまま寝てしまっていた。
そんな遠い優しい日々を思い出すと同時にいつも心の中にある罪悪感が現れる。

「デニール……すまなかった。私が…お父様が悪かった。」
そう口から言葉がこぼれた。

すると眠ったと思っていた、幼子が目を開き
「としゃま…。だいすきよ」と言って私に微笑みかけると安心したようにまた私の肩の凹みに顔を擦りつけ寝てしまった。

きっとこの子は、自分の父親が死んだ事が理解できずに、大人の男に抱かれて、私を父親と間違えただけだ。

そう思いながら、涙が幾筋も頬を伝わり落ち、この子に涙がかからないよう必死で顔を背けた。

その14

私達は、泥のように寝むっていた為、朝になっても目を覚まさず、侍女さん達に起こされても中々起きれなかった。

「エルザお嬢様！クラス様！ラルー様！フィーダ様！ライン様！カル様！！！

もぅいい加減起きてくださいまし。旦那様と奥様がもう食堂にいらっしゃって皆様の事をお待ちですよ！」

何度呼んでも反応しない私達に痺れを切らした侍女さん達の大きな声で無理矢理起こされ、服を着させてもらい食堂まで連れていかれた。

寝ぼけ眼で食堂に着くと爽やかに微笑むおばーさまとちょっぴり不機嫌そうなおじーさまに出迎えられた

「あら、今日は、皆お寝坊さんね。早く席に着いて」

おばーさま…。昨日、あんなに忙しいそうにしていたのに、疲れ一つ見せないどころか、肌の艶が良くなっていて、神々しいくらいの美しさだ。きっと、自分の好きな事に夢中になると日頃のストレスも解消してしまうのだろうか。

「お母様のバケモノ…」

母様が小さな声で、呟いた。

母様が大仕立て大会から解放されたのは明け方近くになってからだという。

しかも、母様が自室に戻る時も、まだ、おばーさまは忙しいそうに働いていたらしい。

母様で無くても呟きたくなる気持ちはちょっぴりわかる。

「え？エルザ何か言ったかしら？」

穏やかな笑顔でおばーさまは母様に聞く。

「いいえ、なんでもないわ」とすかさず、母様も笑顔で返す。

おばーさまと母様って顔から性格まで本当に似ている。

「さぁ皆、ご飯を食べたら昨日作った服のフィッティングをして最後のチェックをしますよ！

その後、軽く昼食を食べてお風呂に入って新年のパーティーに行く支度をしましょうね！」

嬉しそうなおばーさまの声が響く。

「「「「「「はぁーい…」」」」」」

私達はうなだれながら答えた。

そうこうしているうちに私達の元へ朝食が運ばれてきた。

「うまい！！いつもと同じメニューだけど、今日のは、スッゴくおいしい」

フィーダが目を細めてパンにかぶりついた。

「本当だ！凄いおいしい！」

クラスもそれに答える。

「そうかしら？いつもと同じ味だけど…」

母様が不思議な顔で答えた。そのやりとりを聞きながら、ふと思う。

「あれ…？私、昨日夕食って食べたっけ??なんか昨日の夕方から記憶がないわ…。お腹も凄い空いてるし……ラインは、覚えてる？」

「……。そういえば、私も思い出せないかも。食堂までの記憶はあるけど…クラス兄様は？」

「あれ？僕、パンを食べようとしたまでは、覚えてるけど食べたんだっけ？」

「俺も、席に着いた所までしか覚えてないな」

フィーダがモグモグと口を動かしながら答えた。

「あら？あんた達、お父様と一緒に夕飯食べたんじゃないの？お父様、この子達と一緒だったのよね？」

皆の視線が一気におじーさまに集まる。

「……。

あぁ…一緒に食べた…。」

「ほら！食べたんじゃない。

疲れて記憶が曖昧になってるだけよ！聞いてお母様、この子達ったら、凄いのよ！疲れ果てて、昨日の服のまま寝てたの（笑）」

母様がコロコロと笑った。

「あら、今日の方が忙しくなるから昨日よりも、もっと疲れてしまうかもね…。いっぱい食べなさいね」

おばーさまが明るく笑う向こうでおじーさまはどことなく居心地が悪そうにしていた。

その15

昼食を終え、只今お風呂タイムです。

こちらの屋敷には大理石でできた大きなお風呂があり、中央に噴水のようにお湯が湧き出ていて、不思議な事に湯舟の中にお湯が流れると青白くなる。なんでも、美容によいお湯になるような魔法をかけているんだとか。

今は、母様とラインとカルの４人でゆったりバスタイム！

お風呂は、ここに来て唯一最高と思える所だ！

考えて見れば、ちょっと前までは、夏は川で水浴び、冬はお湯を絞ったタオルで身体を拭くくらいしか出来ず、初めてお風呂を見た時には大きな水瓶かと思った程だ。

使用法を聞いた時には、なんて贅沢品なのかと驚いたが、今はお風呂無しでは生きていけない程こよなく愛している！きっとお風呂が人なら何もかも捨てて駆け落ちできるくらい好き！

ビバ金持ちライフ！

お湯に浸かりながらうっとりしているとラインがオドオドしながら聞いた。

「ねぇ母様、新年のパーティーってどんな感じなの？」

「うーん…。そうねぇ…。

予め言っておくけど、きっと私達にとっては、あまり楽しくないわね。
エルフ至上主義の貴族が殆どだから、人間と結婚した私やハーフエルフのあんた達が周りから何て言われるかは行かなくてもわかるわ。
でもね、中には本当にいい人もいたりするから、パーティーも良し悪しね」

苦笑しながら、母様は答えた。

「じゃあ、王族の人達も感じ悪いんだ」
ため息を付きながら聞いてみた。あのバカ親子みたいな人が国のトップと思うとどんよりする。

「確かに王様は、厳格な人で何よりエルフの血を重んじる人だわ。
でも、王妃様はポヤっとした、かわいい感じのいい人よ。
まぁ、ポヤンとしてるかガツガツしてる者でないと王族なんてやってけないけどね」

遠い目をして母様は言った。

「私、行きたくないな…」
ラインが呟く。

「あら、パーティーに出て来る料理は、この国1番の職人が腕に寄りをかけた逸品よ！
しかも、見たこともない食材がズラリとならんで一口それを口にすると天にも登る程美味しいのよ！

し・か・も、催し物がいっぱいで豪華プレゼント付き！
パーティー中ずっと流れる音楽も最高なんだから！」

母様は、おどけた表情で大袈裟に身振り手振りを加えてなんとか私達がホッとするような話を繰り出してくれた。その熱演を見たラインは最後には「面白そう！」と笑った。

そうこうしている内にお風呂の扉の外からおばーさまの声が飛んで来る。

「ちょっと！貴方達いつまでのんびりお風呂入ってるの？クラスやフィーダが待ってるのだから早く出なさい！」

「あぁ…。今日は、頭のてっぺんから足の先までいじくり倒されてお母様の着せ替え人形にされるわよ。覚悟しなさいね」

母様がボソッと小声で私達に言った。

＝3時間後＝

母様の宣言通り私達は、生きる着せ替え人形となっていた。

昨日仕立てた私のドレスは、深いワイン色のベルベットのような生地で出来ており、所々に真珠が縫い付けてある。一体いくらするのこの服！

更に同じ生地に同じく真珠を縫い付けたリボンを使って頭のサイドの髪とリボンを編み混み後ろで一つの長い三つ編みのような感じにされた。

顔にはうっすら化粧までされ、全て出来上がった自分の姿を鏡で見てビックリ！

こ、これが私ですか！？
お姫様みた～い！！地味顔の私がここまで綺麗になれるなんて！何度も角度を変えて鏡を見ても、完璧にお姫様みたいだ！
嬉しくて、皆に綺麗になった私を見てもらおうとウキウキしながら居間への扉を開け、私は仰天した。

母様……！なんて綺麗なの！金髪に映える緑色のキラキラ輝く布で出来たドレスで歩く度にキラキラが飛び散って消える。
胸元は大きく開いているが、嫌らしさを感じさせず逆に上品さが漂う。
髪は横に流してエメラルドの髪飾りがまた似合う。

ラインも薄紅色の花柄のドレスに身を包みハイウエストの形が可愛らしくラインの雰囲気にピッタリだ！サイドの髪だけ結んで小さな薔薇で飾っている。
おばーさまなんて銀色のこれまた光り輝くドレスを纏い、髪はそのまま下ろしているが、銀の布に黒髪が映えて素敵な相乗効果を生み出している。
デコルテには、見たこともない綺麗な青い大きな石のペンダントが下がりおとぎの国の女王様みたいに美しい！
もちろん、クラス達だって絵から抜け出てきたような凛としたかっこよさだった。

私の顔でお姫様になれたんだから、元々美しい顔の人達が着飾れば、その姿は、神クラス……

身のほど知らずでした。私の自惚れた気持ちは、開始三分で跡形もなく砕け散った。

「ラルー見違えたね。いつも可愛らしいけど、今日はお姫様みたいだよ！」

「姉様！本当綺麗だわ！」

クラス、ラインやめて…本物の王子様&お姫様バリに美しい人達から褒められてもよけいに痛いから。

「あ…ありがとう。」私はヒクヒクしながら微笑んだ。

「皆、凄く似合っているわ！おばーさま霞んじゃうわね」

霞みませんって！私と並べば、むしろ引き立ちますって…

早くも私は、白目になりながら王宮に向かうべく馬車に乗った。

やばい、まだ新年会パーティーに行ってないのに、既に帰りたい……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5121x/

ハーフエルフの憂鬱

2011年10月24日23時45分発行